



コラム 花と虫と子どもと未来

2 土づくりのススメ

～なぜ保育現場で土をつくったほうがよいのか～

なぜ、土づくりを勧めるのか

僕が、なぜ「土をつくろう」とか「植物を植えるベッドをつくろう」と呼びかけるのか、その理由をまとめておきたいと思います。

まず、押さえておきたい背景として、多くの保育の実践現場で、「土は買うものである」という考え方が当たり前になっているという現状があります。僕は、土が買えるということを否定しようとは思いません。ただ、「土は買うものである」という選択肢1択になってしまっていたり、そうしか考えられなかったりというのはあまりにも偏りすぎだと思うのです。

土の大切さが見えてくると……

買うという行為で土が簡単便利に手に入ってしまうことが続くと、弱まってしまったり失われがちになったりすることがあります。それは土を「大切だ」と感じたり、土を「愛おしく」思ったりするような感情や態度や身体的な感覚です。ぐうたら村に来られる保育者や保育者を目指す学生たちと、クリなどの広葉樹の落ち葉を集めて落ち葉堆肥をつくるのがよくあります。1年ほどかけて分解されてできた土（落ち葉堆肥）を手にして、「やわらかい!」「軽い!」「あたたかい!」と感動されることが、これまたよくあります。そんな方々と作業をしながらおしゃべりするのですが、「今までは、土は単なる素材だと思っていたけど違いますね」「植えるものばかり大切にしていたけど、土そのものが大切だと思えると、その場所全体が大切に思えてくる」なんていう発言が飛び交います。土が大切だと思えてくると、不思議なほどにそこに生きる植物や他の生き物のことなどが大切と思えてくるのです。身体を通して「土」に対する認知が変化することで、生命や生態系に対する認知も変化しやすいのだと思います。

幼い人に伝えるために、保育者自身の意識を変える

いつも土を買うという1択しかない実践の積み重ねの中で、保育の実践現場で幼い人たちと野菜や花を栽培することを強固な目的にして活動すると、土が単なる素材としてしか見えないような、土に対する認知が軽薄なものになってしまうのです。本来、野菜や花を栽培することを通して、「生まれてきたこの世界って、なんてよくできているんだろう」とか、「なんて美しく不思議なんだろう」という、幼い人たちと最も分かち合いたいことを、分かち合いにくい状態に保育者自身になってしまいやすいと言ってもいいかもしれません。

幼い人たちが園庭で豊かに育つことを考える時、保育者が植物や生態系に対する知識を増やしたり、野菜や花栽培のスキルを学んだり、他園の野菜や花栽培の先進的な実践事例から学ぼうとしたりすることも重要かもしれませんが、実は最も重要なのは保育者自身が花や虫や微生物などを「大切だ」と感じたり、「愛おしく」思ったりするような身体的な感覚です。それには「土は買うものである」ということを当たり前の園の文化にしないで、「土をつくろう」という文化を織り交ぜてゆくことが、未来志向の保育文化をつくるひとつのカギだと言えるのではないのでしょうか。